

# 韋いへん編

愛知大学図書館報

No.35

「韋編」……文字を書いた竹や木の札を、なめし皮の紐でとじた上古の書物。

## 図書館の課題・宿題

### 図書館長 常石 希望

任期2年間ということで、このたび思いもかけず図書館長の責務を負うこととなった。これに関する個人的な所見は多々存すが、ここでは何よりも先ず今後2年間およびそれ以降に、図書館がなさなければならない課題・宿題について述べておきたい。

\*

(一)「名古屋(ささしま)新校舎移転」である。名古屋および車道キャンパス、豊橋キャンパスの一部学部移転、あるいは新学部設置にともない、名古屋(ささしま)新校舎図書館を構築するという課題である。すでに決定済みの限られた新図書館空間を、いかに効率よく、より快適に使用できるようにするのかという課題、あるいは移動書籍の選択とそれに連動する保存書庫の確保、名古屋市との協調に基づく市民開放図書館という概念作りと現実的対応の問題など、課題・宿題は多い。

図書館も移転にとまなうこれら課題を、一定のタイム・テーブルを作成したうえで、スタッフ全員(両館長、車道を含め各学部から選出されている図書館委員、状況にもっとも精通している図書館職員)が、何よりも十分な話し合いを通して、逐一決定・解決していかなければならないと考えている。さらには



\* \*

出来る範囲内で、「大学図書館」というものの存在意義と現状への再検討、現状における問題点の提起、あるいは他大学の実態調査などを介し、「名古屋(ささしま)新図書館」の構築と維持運営にスタッフ全員で取り組みたいと願っている。

(二)上に挙げた諸点のうち、特に「保存書庫」の設置とその機能充実は、きわめて重要な課題であろう。従来もわが愛大図書館は分散キャンパスという宿命下、三キャンパスの図書貸し出しを集配システムによって対応している。しかし、今後もこの宿命を残したままで、さらに都市型キャンパスという限定空間の問題とも対峙しなければならない。言い換えれば、従来の三キャンパス分散の問題を残しつつも、質の異なる新しい課題を突き付けられたこととなる(もとより、それに伴う大きい成果を期待しつつ)。愛知大学の図書館および各機関の総蔵書数は、すでに約150万冊余を誇る。うち名古屋キャンパスの蔵書数は、約50万冊。名古屋キャンパス3学部の移転にともない、基本的にこれらの大部分が移動する。しかし新キャンパスには、名古屋3学部に加え、豊橋2学部プラス新学部の設置も検討されている。

しかるに新図書館の図書収容能力は、現時点では大雑把な計算しか出来ないが、約50万冊プラスアルファと想定されている。しかも毎年毎年、図書は増え続ける。かかる状況下、大学における知の中心・図書館として急場しのぎではない、総合的かつ長期的なニーズに応える「書庫対策」が求められるのは言うまでもない。

\* \* \*

(三) 他方、図書館の「利用法」という点にも着目したい。これは、けっこう興味を惹かれる課題でもある。以下は、そのための単なる手がかり、あるいは例にすぎないが、思いつくまま2・3の点を述べてみたい。

まず「教員」の利用。実は、教員の多くはあまり図書館を利用しないものだ。本「韋編」の過去号を見ても、従来の館長の多くが「平素、図書館をあまり利用しないのに、館長になるとは…」といった言をのべておられるように、教員の専門研究というのは多くの場合かなりマニアック（よく言えば専門性が高度）であり、愛大はもとより日本でも数名しかいないような細分化された分野をメジャー研究としているケースが一般的であるからだ。ハングル文献の中でも、さらに特殊な分野を扱う私の場合も同様である。そんな特殊文献を、図書館に入れてもほかに誰も利用しないことが分かっている。従って、自分のメジャー研究関係の文献は図書館に入れることを遠慮し、別途個人的に購入し手元に置く。こうしたケースが多く、その結果、教員は「図書館はあまり利用しない」ということになる。

しかしながら、教員の研究も何もメジャー研究だけではない。共同研究など「マイナー研究」にも関わることが奨励されて久しい。こうして、本来の専門を一步退いた共同研究や基礎研究にかかわる場合には、愛大の図書館は実に役に立つ。その分野の蔵書が、優れている。少なくとも、私が関わる思想系列に関してはそうである。そして、かかる「研究基礎分野」の文献とは、同時に「学生の専門

研究」と重複する分野に他ならない。結論的に言えば、「大学図書館」にとって最も重要な「重要基礎文献」の愛大図書館の充実を、教員・学生ともに再認識していただきたいし、この充実を継続する点も課題の一に挙げたい。

\* \* \* \*

(四) 最後に、「学生」の図書館空間の利用法について一言。例えば、韓国では図書館の第一義の利用法は、広義の「学習室」である。第一に、個々の学生の学習室としての空間利用である。多くの学生が、勉強の大部分を図書館です。図書館は本を借りる所ではなく、勉強するための場所（本は「借りる」までもなく、図書館内で自由に使える）。そのため都心のほとんどの大学図書館は、夜は12時近くまで開館しており、朝は4時5時から開館する。終電前や始発電車後には、図書館付近は学生が多い。24時間開館の大学図書館もある。館内には軽食コーナーがあり、夜間は様々な自動販売機で自由に飲食も可。図書館と図書館にぎ付近は、大学内でも学生たちで最も賑わう場所の一である。

第二に、韓国では「スタディー」と称される任意のテーマ設定による学生間相互の「勉強会」が盛んで、昨今は図書館が多く利用されると言う。かつては「空き教室」などが、それに当てられていた。しかし現在では「スタディー・ルーム」の名で、どの大学図書館にも付設されている。コンピューターは必ずあり、必要図書も視聴覚設備も備わっている「図書館」の方が、はるかに便利で充実した共同学習が可能となるわけだ。こうした大学図書館の利用法は、恐らくは欧米の大学図書館の利用法に学んだものだろうと言われる。欧米や韓国における、かかる学生の勉強会の場としての「図書館利用」も課題の一である。少なくとも、都市型図書館の長所を生かし、第一の点から十分に検討し活用したい。

(法学部教授)

## コレクション『江口文庫』について

経済学部教授 森 久男

2003年9月26日、本学法学部の故江口圭一名誉教授が逝去された。江口教授はそのわずか半年前に本学を定年退職されたばかりで、その早すぎる訃報を耳にした時には、なにかの間違ひではないのかという気がして、とても意外の念に打たれた。11月30日、本学名古屋(三好)校舎で74名の教職員・院生・学生等が参加して江口圭一先生を偲ぶ会が開かれた。この追悼会の席上、江口都夫人の挨拶があり、故人の生前の研究生活の一端が紹介された。

江口夫人の発言の中で、江口教授の古書蒐集癖に関する興味深い一節があった。すなわち、家族にとっては迷惑な話であるが、しばしば古書店から段ボール箱に入った書籍類がいきなり送られてきて、その金額を尋ねると、「百万円」とか、「百五十万円」という答えが平然と帰ってきたそうである。江口家の建物はかなり大きなものであるにもかかわらず、家の中は書物であふれかえっていたとのことである。

年末、江口教授の遺族から同氏の蔵書を愛知大学に寄贈したいとの意向がもたらされた。のち、様々な紆余曲折があったものの、翌年これらの蔵書はすべて本学豊橋校舎の図書館で整理・所蔵することになった。江口教授の蔵書は膨大で、豊橋図書館に運び込まれたのは、正規に刊行された図書資料の他に、古書店で蒐集した各種の雑多な資料、他の研究者から寄贈された抜き刷り、コピー、講義ノート、メモ等が含まれている。講義ノートやメモ類に目を通すと、江口氏の学問研究の方法が手に取るように分かって、きわめて興味深い。

江口教授はクラシックを中心とした音楽鑑賞にも造詣が深く、遺族から膨大なレコード類も寄贈の意向が表明されたが、さすがにレコードは図書館の所蔵対象ではないので、遠慮したとのことである。

江口教授の大学院生時代における修士論文の研究テーマは、大恐慌期の都市小ブルジョアジーに関するもので、営業税反対運動 排外主義といった風に研究内容が推移し、『都市小ブルジョア運動史の研究』(未来社、1976年)で研究成果が集大成され、1976年以降は日本帝国主義史研究へと研究テーマが移っている。

こうした、テーマ変更の転機となったのは岩波講座への寄稿であり、1971年に『岩波講座世界歴史』で「日本帝国主義の侵略」を執筆したのを皮切りとして、1976年に『岩波講座日本歴史』で「日中戦争の全面化」を、1992年に『岩波講座近代日本と植民地』で「帝国日本の東アジア支配」を、1994年に『岩波講座日本通史』で「通史 一九一〇 - 三〇年代の日本」を次々と発表されている。ちなみに、筆者も『岩波講座近代日本と植民地』で「関東軍の内蒙工作と蒙疆政権の成立」を寄稿しており、研究手法はまったく対照的であるが、本学では江口教授と研究領域がもっとも近かったと言える。

この間、1986年に『十五年戦争小史』が青木書店から出版され、いわゆる「十五年戦争」論の主唱者として著名となり、その問題意識を発展させて、1998年に『日本帝国主義史研究』が青木書店から、2001年に『十五年戦争研究史論』が校倉書房から出版されている。

このほか、各論として、『資料日中戦争期阿片政策 蒙疆政権資料を中心に』（1985年、岩波書店）『日中アヘン戦争』（岩波新書、1988年）『証言・日中アヘン戦争』（岩波ブックレット、1991年）が刊行されている。江口教授による日本の植民地・占領地域における阿片政策研究は、つねに引用される先行研究と言える。

以上の簡単な研究業績の紹介からも明らかのように、江口教授は典型的な「講座派」の岩波文化人で、岩波講座で各種の通史を担当される中で、みずからの学風を作り上げてこられたことが分かる。これが江口教授の幅広い関心領域の広がりや形成すると同時に、この学風が蔵書の数量のみならず、幅の広さによく反映されている。

筆者は江口文庫の整理をすすめる最中、その分量のあまりの多さにいささか辟易とさせられもしたが、収穫も大きなものであった。江口文庫の中の図書資料も見事なもので、とくに軍事関係書籍が纏まったコレクションになっている。しかし、一般に公刊された図書資料は他の図書館でも閲覧できるので、ここでは埃が厚く堆積した各種の雑多な手記・報告書・内部刊行物・行政執務書類等について紹介することにしよう。

江口教授の収集資料の中で、分量的にかなり多いのが外務省所蔵資料である。外務省資料は戦後の混乱期にかなりの資料が焼却されたり、破棄されたりしたと言われている。江口教授の収集された外務省資料には、役所内部の執務資料や一部が焼け焦げた報告書が含まれており、その出所が廃物として処分された資料が古書市場に流出したものであることが分かる。分量として多いのは、戦時期の世界各国の経済・政治・軍事情報の調査報告書で、中国関係の報告書もかなり含まれている。また、国際外交協会のような外務省の外郭団体が発行したパンフレット類もかなりの分量である。

外務省資料に次いで多いのは、軍事関係の

内部資料である。中でも珍品と言えるのは、『満州事变史』（第一輯、第一輯附録、第三輯、第六輯、第六輯附録）『陸軍実役停年名簿』（大正5年、昭和2年、昭和10年）『占領地統治及戦後建設史草稿』（総力戦研究所、昭和17年）陸軍パンフレットの各シリーズ等々である。日中戦争の裏面史において、支那派遣軍で通信傍受・暗号解読を担当した栄部隊が活躍しているが、江口文庫には、1937～1940年の外国語放送の傍受記録である『各国宣伝放送』『哈府露語放送』『同盟来電（不発表）』『漢口UP・漢口ロイテル』『漢口日本語放送』等が残されている。このほか、個々の陸軍軍人が残した軍内教育資料、某軍医の龐大な日記・メモ類、盧溝橋事件の体験記等がある。

江口文庫を有名にしたのは、すでに紹介した『資料日中戦争期阿片政策』で利用されている『沼野英不二収蔵資料』（蒙古連合自治政府経済部次長沼野英不二の旧蔵資料）である。同書で収録されているのは、「阿片ニ関スル調査書類」というファイルを中心として、蒙疆阿片に関係する他の内部資料が一部追加されている。沼野資料には阿片以外に、財政・貿易・外国為替・金融・物価等の資料がかなり保存されているが、多くの行政執務用の統計表が生そのまま残されていて、かなり読み込むのが難しいせいか、江口教授はほとんど利用していない。

このほか、阿片資料として、満州国・蒙疆政権・海南島等で阿片政策の実務に携わっていた及川勝三氏が江口氏に寄贈した報告書類が数点残されており、分量はさほど多くはないが、貴重な内容が含まれている。

江口資料の整理で閉口させられたのは、細かいパンフレット類が玉石混淆の状態が無数に残されていたことである。この短い文章ではその内容を詳しく紹介できないが、関心のある人は書庫に入って自分の目で確認して頂きたい。

## 長い知性、短い知性

国際コミュニケーション学部教授 新形 信和

知性に寸法があるなどという、意外な感じがする人も多いかもしれません。しかし、知性には寸法があるのです。長い知性は連続的な知性といってもいいでしょう。連続的ですから射程が長いのです。それにたいして、短い知性は非連続で断片的な知性ということが出来ます。非連続で断片的だから射程が遠くまでとどかないのです。事例を一つだけ挙げてみます。もうずいぶん昔に新聞の学芸欄で読んだ都築卓司という人の文章の要約ですが、日本とヨーロッパの乗り物の歴史の比較の話です。

古代日本の牛車は中国から入ってきた。牛車とは「牛にひかせた乗用の屋形車」(広辞苑)で、そのなかに高貴な人たちが乗ったものである。ところが、がたがた揺れて乗り心地がよくないというので牛車は廃止になった。つぎに登場したのが輿である。これは牛にひかせるのをやめて、車輪を取り去り、屋形部分の底辺の左右に長い棒状の材木を一本ずつ取りつけてその前後を複数人間が担ぐ乗り物である。しかし、それでもよく揺れるというので、人が乗る屋形部分を担ぎ棒の下にもってきたら乗り心地がよくなるだろうと考えて、いわゆる駕籠ができた。担ぎ棒は一本になった。大名から庶民まで、西洋文化を知るまでの日本人はこの乗り物を利用していた。これが日本の乗り物の歴史である。

ヨーロッパでは牛車ではなく馬車である。がたがた揺れて乗り心地がよくないというので、車輪がころがる道路をなめらかにしようと、ギリシアでは平たい石を敷き詰め、ローマでは土を掘り起こして舗装した。また、車輪の振動が乗用部分に直接に伝わらないように車軸と乗用部分を切離し、皮製のサスペン

ションをつけた。やがて産業革命の時代になると、牽引するのは馬ではなく蒸気機関に代わり、現在の自動車や汽車などの原型が誕生した。

日本の乗り物の発達(?)の歴史のなかには日本文化のある側面がみごとに現れていると思いませんか(もちろん、すべてではありませんが)。最近、気になるのは、生活の身近なところで、日本文化の短所である、断片的で非連続の短い知性が横行しているように思えることです。

現在、楽天にいる野村監督がまだヤクルトにいたころのことですから、もうだいが昔のことになりますが、野村氏が、若い選手にとって一番大切なことは感性を磨くことや、感じなかったら何も考えやせん、人は感じるものがあってはじめて、それについて考えるんや、と語っているのを聞いて感心したことがあります。それは、野球にかぎったことではなく、人生一般についても言えることです。詩人の長田弘氏も、「考える」とは理屈をつけることではなく、「深く感じる」ということ。「深く感じる」力を自分の中に育てられないと、何も見えてこないんじゃないだろうか」と語っています。「深く感じる」力を自分のなかに育てることによって、知性は連続的になり長くなるのです。

現在はIT化の時代です。インターネットを通じて無限の情報に接することができるようになりました。一昔前と比べれば夢のように便利な手段が簡単に利用できます。しかし、かんじんなことは、簡単に手に入る情報そのものではなく、その情報の奥に、あるいは、情報と情報との、いわば、あいだにあるのではないのでしょうか。サン＝テグジュペリの『星

の王子さま』のなかのキツネのおじいさんが語っている「かんじんなことは、目に見えないんだよ」ということばを忘れるようなことがあってはならないと思います。

わたしなどは古い人間のせいでしょうか、ワープロやパソコンの画面に浮かぶ文字はなんだか頼りなくて、違和感が残ります。文字にむかう視線がきちんとこちらに帰ってこない感じがするのです。その点、紙に印刷された活字はしっかりしていて、視線はちゃんとこちらに帰ってきます。ですから、活字と自分とのあいだで確かな対話をかわすことができるような気がするのです。「深く感じる」力を育てるには、そのような対話を欠かすことはできません。

もう数十年前のことになりますが、わたしの学生時代は、現在のように情報が簡単に手に入る手段はもちろんありませんでしたし、図書館もずっと貧弱で不便なものでした。愛知大学の図書館を見ていると、現在の学生は恵まれているなーとよく思います。しかし、不便ではありましたが、自由だったと感ずることがあります。自分で苦労して情報を手に入れて、その情報とゆっくり対話をかわすゆとりが十分にあったからです。現在から見れば、そのように強制されていたのだと言えるのかもしれませんが、どんなに豊富な情報が手に入ろうとも、かんじんなことが、情報そのものにあるのではなく、ある情報の奥に、あるいは、情報と情報とのあいだに存在するのであれば、情報そのものにとらわれることなく、自由でありえたとと言えるのではないのでしょうか。

将来、図書館が電子化しても、本という媒体が必要ではなくなることはないでしょう。また、必要ではなくなるようなことがあってはならないと思います。それは、わたしなどからすれば、知性がますます断片化し短くなっていくことを意味するからです。

さきほど、わたしの学生時代に図書館が貧弱だったと言いました。たとえば、当時、ド

ストエフスキー全集は戦前のものを除けば、古い米川正夫訳のものが一種類あるだけでした。現在では、筑摩書房版、河出書房版、新潮社版など何種類もあってたいへん便利です。『悪霊』をはじめて読んだのは、小沼文彦個人訳の筑摩書房版全集でした。最近、この『悪霊』のことをよく思い出します。図書館から依頼を受けて「長い知性、短い知性」という題で原稿を書きはじめたのも実は『悪霊』のことを思い出したからです。『悪霊』は「ネチャーエフ事件」に触発されてドストエフスキーが書いた長編小説です。この作品にはスタヴローギン、キリーロフ、シャートフ、ピョートルなど様々なしかたで「悪鬼にとり憑かれた」印象的な人物が登場します（これらの人物のうち、シャートフは殺害され、スタヴローギンとキリーロフは自殺します。ネチャーエフをモデルにしたピョートルだけは計画が破綻しそうになると組織を捨てて遁走します）が、いま念頭にあるのは、ピョートルの父親であるステパン氏のことです。前記の登場人物の父親の世代である1840年代の西欧的知識人である彼は、作品の終わりで次のように述懐しているのです。「わたしたちはみんな悪鬼に憑かれて、狂い回りながら崖から海へ飛び込んで、溺れ死んでしまうのです。それがわたくしたちのたどる道なのです」と。

悪鬼がつけ入ることができるのは、短い知性にたいしてです。ステパン氏の時代のロシアというのは、西欧文化をロシアが受け入れるようになってから140年ほど経過していました。ちょうど同じくらいの時間が日本でも経過しています。現在の日本において、長い知性をもつこと、「深く感じる」力を育てること、が、いま、焦眉の問題として差し迫っているように思われてなりません。

2008年9月5日記

## 図書館の思い出

現代中国学部教授 三好 章

小学生の頃、住んでいた家から歩いて15分ほどの所に県立図書館があった。そこは、小学生以下とそれ以上に閲覧室が分けられ、児童図書館はすべて開架だった。そのため、どんな本でも手にとってみることができ、家にはない本を見るには絶好の環境だった。もちろん、父や母が本を買い与えてくれたりしたことはあったし、その記憶もまた鮮明である。エンリコ フェルミやミチューリンの名を、ある意味、未整理の状態で頭の中に入れ込み、研究という仕事をする人、がいることを知ったのは、父からもらった小学生向け科学ノンフィクションの本からであったし、ガリバルディやピカソの名前も伝記の本からいつの間にかなじんでいった。しかし、毎月欲しいだけ本を買ってもらえるわけではなかったし、学校の図書館の本にはあまり興味を惹かれなかったこともあり、地方都市とはいえ少くとも県庁所在地の県立図書館の閲覧室に初めて入った時、まるで本が無尽蔵にあるように思え、休館日の月曜を除いては、ほとんど毎日通っていた。

そこで見たたり読んだりした本は、自分がまだまだ幼かった頃でもあり、いかにも小学生向けの図解説明中心の科学図鑑類や、写真がたくさん掲載されている世界の地理紀行など、今でいうビジュアルなものが多かった。それらを通じて、火星旅行や原子力の平和利用、北欧の国々など、小学生にとっての非日常世界をかいま見ることができた。それらが自分のささやかな好奇心を、とても刺激してくれたことを覚えている。もっとも、原子力の平和利用の一例として、ハリケーンの中心部に原爆を投下して消滅させるやり方とか、

北極海の海水を中央アジアの乾燥地帯まで引き込むために多くの核爆弾で大地を切り開くなど、いま考えると何とも危なっかしいプランが多数出ていたことを覚えている。とはいえ、これらは人類の無限の未来を無邪気に信じられた高度成長期の日本を象徴もしていたように思えてならない。また、外国といえばアメリカのイメージが強烈だった1960年代、ヨーロッパ世界というアメリカと似てはいても、別の雰囲気を漂わせた世界が存在することを、写真などを通じて初めて感じた。つまり、図書館は好奇心を満足させてくれるところであり、未知の世界への入口でもあった。本が沢山あることで生じるにおい、つまり「書香」がそこにあったのだが、当たり前ながら小学生の頭の中にそんな言葉が浮かぶはずはなかった。

さて、小学生向けの閲覧室で初めて出会った本たちのうち、現在まで時折読み返し、というのは自宅の書棚に大切な蔵書として収めているものを紹介したい。まず、チャベックの『長い長いお医者さんの話』。チャベックは、現在、岩波文庫に古典的SFである『山椒魚戦争』が収録されており、どちらかというとシニカルな作家のように思われているかもしれない。かれの生まれ育ったチェコは、ハプスブルク帝国の統治下、19世紀後半以降急速に工業化をとげ、一時は一緒に一つの国家を形成していたスロヴァキアが農業国のみままであるのに対し、プラハを中心に都市化が進んでいったこと、それを背景にカフカのような20世紀的作家が生まれたことは周知のことであろう。チャベックもまた、そうしたバックグラウンドの中で作家活動を始め

たのだが、その中に童話集がある。とは言っても、『長い長いお医者さんの話』ではチャベックの同時代人が主人公として、あるいは語り手として登場する。なにしろ、のどに果物の種が詰まって声が出なくなってしまった魔法使いの治療にいったお医者さんが語るあれこれ、深夜の郵便局で封書をトランプにして遊ぶ郵便屋さんの小さな妖精、その妖精と話をしているうちに差出人も宛先も書いていないのに、一番心がこもった手紙を配達するハメになった本物の郵便屋さんなどなど。最近はやりの「都市伝説」などという、味気なく、ざらついた言葉では表せない情緒溢れる近代の都市が書き込まれている。初めてこの本を読んだ時、どこか不思議な感覚が溢れているように思えた。それは、日常の中に非日常を見つけ出し、あるいは日常と非日常の合間に漂うはかなさを含んだ浮遊感を感じたからだろうか。単なる現実逃避ではなく、現実に向かい合う中から、そこに人間の持つ優しさ美しさが描かれていることを、子供ながらに思っていたからであろうか。

成長するにつれ、当然のようにチャベックの童話を読むことはなくなった。ところが、修論を書いていた頃、いまはなくなってしまった池袋の芳林堂書店で偶然チャベックのお医者さんに再会した。まだモンブランで原稿用紙のマス目を埋めていた時代である。右手が疲れたことを口実に、本当はなかなか先に議論が進まなかったからだが、行きつけの芳林堂にゆき、児童書のコーナーをうろついているとそこにチャベックの本があった。思わず手に取り、そのままレジへ行き、四畳半の下宿で一息に読んでしまった。鬱陶しい気持ち晴れ、気持ちも和らいだことを覚えている。ただし、その後すぐにインクが減った、というわけではなかったが。

もう一つ、図書館で巡り会った大切な人物がドリトル先生である。チャベックの『お医者さん』が中野好夫なら、こちらは井伏鱒二

の名訳である。とはいえ、そんなことは小学生には何の関係もなかった。それより、ドリトル先生シリーズのしゃれた装幀の楽しさ、ところどころに挿入されているカラーの挿絵、なによりふとっちょのドリトル先生の姿に惹かれたようだ。「研究者」などという言葉は知るよしもなかったが、「学者」という存在を初めて知ったと言ってもいいかもしれない。何しろ、常人には理解の外であろう動物の言葉を研究し、それを操って動物たちの危機を救い、バツに乗って月に旅行し、巨大な泥亀との対話でノアの洪水の状況を聞き出したり、といったあんばいなのであるから。アームチェア スタディとは一線を画した実践的な姿に、とこの歳になると総括してしまう悪い癖が染みついてしまっているが、興味津々、毎月新しい巻が図書館に入るのが待ち遠しく、カウンターの司書の先生に頼んで、最初に借り出すことに成功していたのであった。

ドリトル先生の助手であるトミー スタビーズが、当時の自分に一番年齢に近い設定であったせいか親近感を持って読んだが、そのころはネコ肉屋のマッシュマッグなどの存在をよく理解することはできなかつたし、そもそもヴィクトリア朝イギリスの繁栄の中の孤独をドリトル先生が象徴していることなど、感じ取るよしもなかった。一般的な変人としての学者の姿がドリトル先生であるように思えたし、そうしたドリトル先生の様子が、ちょっとへそ曲がり、ほかの子供と同じことをするのが好きではなかつた小学生には、好ましく感じられたのである。

大人になってから、研究会（きちんとした歴史研究の集まり）で何人かのドリトル先生のファンに会うことがあった。そのうちの一人から、研究会終了後の酒席でドリトル先生は菜食主義者なのか、との問いかけがあった。そんなことは考えたこともなかつたので驚いたが、よくよく考えてみるとドリトル先生の

好物の一つが牛のステーキであったこと、魚を口にしていたことも思い出した。これは矛盾なのか、それとも……。とまれ、単純な動物愛護の作品などではない深さが、ドリトル先生シリーズにはある。

就職して最初のボーナスで、ドリトル先生シリーズを12冊セットで買った。初めて読んだ時のワクワクする気持ちが、本を手にするるとよみがえってきた。この12冊は、チャペックのお医者さんと一緒に、いまでも自宅の書棚に鎮座している。

なお、エディ マーフィの演ずる映画のドリトル先生は、ロフティングの作品とは別物。見ている分には、面白いが……。

あちこちの図書館で、このほかにも多くの本に出会ってきた。仕事で図書館を使うようになってからは、専門の歴史書がどうして

も中心になるものの、愛大のような開架式の図書館では本の森の冒険をしたくなる。その時は、目的の本探しがだんだん意識から遠ざかっていって、そこにいるだけで楽しくなってしまう自分がある。本探しと、本を読むことが自己目的化されていくのがよくわかる。自分の家でも、探しているはずの本が見つからない時、探しながらほかの本に目がいってしまい、結局別の本を引っ張り出して読んでいることがよくある。それが、元々探していた本と何の関係もないことは、しょっちゅうである。本に触れていれば、それでウキウキしてくる。仕事の道具としての本でも、なで回したりページをさすったり。辞書などは、手になじんでくると親しい友人のようだ。そうした自分の本たちとは別に、図書館が冒険の場所であることは、いまでも変わりがない。

## 図書館でのコピーについて Q&A

著作権法とのかかわりで制限があります

**Q. 図書館にはコピー機があるのに、なぜノート等のコピーはできないのですか？**

A. 図書館にコピー機があるのは著作権法により図書館資料のコピーが認められているからです。持込み資料やノート用にコピー機を設置していません。

**Q. 全文をコピーしたいのですが…**

A. 図書の全文コピーは原則不可です。著作物全体の半分以下が許可されます。例えば200ページの単行本の小説であれば100ページまではコピーが許されます。

**Q. 雑誌・大学の紀要・新聞は、コピーできますか？**

A. ● 雑誌・大学の紀要は次号が発行されれば、個々の著作物の全文コピーが許可されます。

● 当日の新聞のコピーは認められません。

著作権法（図書館等における複製）

第31条 図書、記録その他の資料を公衆の利用に供することを目的とする図書館その他の施設で政令で定めるもの（以下この条において「図書館等」という。）においては、次に掲げる場合には、その営利を目的としない事業として、図書館等の図書、記録その他の資料（以下この条において「図書館資料」という。）を用いて著作物を複製することができる。

1 図書館等の利用者の求めに応じ、その調査研究の用に供するために、公表された著作物の一部分（発行後相当期間を経過した定期刊行物に掲載された個々の著作物にあっては、その全部）の複製物を一人につき一部提供する場合

2 <以下略>

## 私の推薦する図書

### 読書のススメ - 古典から学ぶ -

経済学部長 栗原 裕

学部学生時代には本を読む機会が多くあったが、大学院時代には、研究分野以外の本を読むことはほとんどなかった。しかし、年月が経過するにつれ、専門分野のみならず、専門外の分野の書物から啓発されることが度々ある。

経済学の分野に限らないが、研究の高度化は、専門化、細分化の方向に進んでいるのは否めない事実である。それは、否定すべきことではなく、利点もあるけれども、視野、視点を広く持ち、透徹した考察、洞察力をもって、獲得した専門的知を本来あるべき人間的知に高める努力をすることは、大学人にとっての務めである。国際化、複雑化、そして多様化する世の中は、特にこうした視座と姿勢を求めている。

お勧めしたいのは古典である。普通の講義はもちろん、私が専門とする分野に関して読む文献は高度にテクニカルな論文や書物が中心である。現実の社会と古典とは乖離したイメージがあるかもしれない。けれども、古典という情報は皆に平等に提供されており、思索の素となる要素が多分に含まれている。時には少し下がって、謙虚に、素直に古典と対峙することによって、鳥瞰的に物事を見る習慣が醸成され、ひいては、人格と見識の形成につながることになる。古典を前にして自己を振り返ると、心もとなく、かつ恥ずかしく感じるが、古人に倣い、よりよく生きるための知性を高める情熱だけは一生失いたくない気持ちになる。そして、古典から現実の世界に戻ったときに正しく普遍的な判断、行動ができるような“人柄に支えられた知”が培われるであろう。

若い世代にぜひ読んでもらいたい本を何冊

かあげようと思ったが、どうしても数十冊になってしまう。そこで今年の夏休みに再読した本のうち、比較的若い世代に読まれやすい、経済関係以外の書物をあげることにしよう。

カント『道徳形而上学原論』

シェイクスピア『ジュリアス・シーザー』

鈴木大拙『東洋的な見方』

道元『正法眼蔵』

\* \* \* \* \*

### 小坂井 澄著『人間の分際』

国際コミュニケーション学部長 田本 健一

2008年夏のある日、筆者の大先輩である、秋田聖霊女子短期大学副学長佐藤栄悦先生から封書が届いた。手紙には、先生ご推薦の著書が数点、解説とともに記されていた。

そのうち、先ず筆者の目を惹いたのは、『人間の分際』と題した書物であった。これは、岩下壮一神父(1889・9・18～1940・12・3)の一生を綴ったものであり、彼が何故名誉も財産も捨ててハンセン病者の友となつたのが書き連ねたものである。

本著では、また、哲学的、思想史的、宗教学的、西洋言語・文化論的、そして日本近・現代史的観点のいずれにも関わる記述が網目のように展開されている。フランス語、英語、ドイツ語、ラテン語に長け、大学では哲学を専攻し、宗教においても常に思索を重ね、フランス、イギリス、イタリアと3年間に亘る留学の末、遂には神父に叙階された岩下壮一を論ずるには、そのような広範な視野から記述されなければならないのであろう。その道の全くの素人である筆者が、受け身とはいえ、宗教的、哲学的、思想史的思考のまねごとは

できた。得るものは大きかった。

ところで、本書の題名となっている「人間の分際」とは、神父岩下壯一が後年よく口にした言葉であったという。「分際を知れ」とか、「分際をわきまえているか？」といった言い方をしたという。これは、現代の若い人たちにとっては、死語のようなものであろうか。日本語独特のニュアンスを持つ語であり、“単に身分を言いあらわすだけでなく、そこには蔑視、あるいは卑下の意識や感情が込められている”と著者小坂井澄は解説する。ある篤信の老人の回想を紹介して、本稿を終えることとする。“分際ということ、非常に重んじておられましたね。ですから、わたしのような下の者が、ちょっとでも差し出がましいことを言うと、むっとされた。ふだんは冗談話で人を笑わせて、親しみやすい方でしたが、そういうときは、ひやりとするような鋭さを感じたものです。”

\* \* \* \* \*

アレクシ・ド・トクヴィル著 松本礼二訳  
『アメリカのデモクラシー』

(岩波文庫、全2巻4分冊)

法学部長 田中 正人

著者トクヴィルは、フランス革命によって没落した貴族の末裔である。1831年に内務大臣からアメリカにおける行刑制度視察の命を受け、9ヶ月にわたり当時の全米24州を精力的に見て回り、帰国後さらにイギリス視察を行った後に本書を執筆した。

当時のアメリカは、イギリスからの独立を勝ち取り、合衆国憲法を制定してから40余年後。南北戦争という内戦を経験することとなったとはいえ、独立革命後、いわば「更地」に人工的に自由と平等の民主国家を建設しつつあった。

他方、著者の母国フランスは、革命によっていったん王政が打倒されはしたものの、「暴走」からナポレオン帝政へ、さらに正統王朝派

による復古王政を経て、1830年の七月革命でより自由主義的な七月王政を迎えるという、歴史の重みゆえの変転を経験していた。

トクヴィルは、平等主義の悪弊として同質化が進行し、多様性が失われ、「多数者の専制」をもたらす危険性を指摘し、宗教がアメリカという民主国家の「道徳的紐帯」となっていると観察し、「民主的な諸国において、個人の独立の範囲が貴族制の国々と同じように大きいと期待してはならない」と警告し、「アメリカにアメリカ以上のものを見た」。

アメリカ民主政の実態と民主政の本質についてのフランス貴族による省察たるこの古典。200年近くを経た今、日本の若い学生諸君がこれを読むことは、時空間を超える知的遊戯の類に属するかもしれない。かつて私が学生だった頃は、井伊玄太郎による迷訳(現在は『アメリカの民主政治』講談社現代文庫)以外には、今回の岩波版と同じ松本氏と岩永健吉郎との共訳(抄訳)しかなかったが、ようやくまともな全訳が出たこととなる。

\* \* \* \* \*

"日本そしてアメリカ合衆国"

経営学部長 村松 幸廣

現代日本の変化はさまざま様相を呈している。格差のみならず、政治や組織のいたるところに見られる無責任体制は社会構造を蝕む状況にある。自己中と言われて久しいが、自己中心の傾向が、政治・経済・社会いたるところに見られる状況を看過できない。日本はどこに進もうとしているのであろうか。グローバル化、競争原理の導入による弊害は日本の良さを失わせている。

それは、戦後の急速な高度経済成長とバブルの経験に起因するものである。日本の発展は、欧米の後追いであり、なかならずアメリカのコピーである。高度成長期は人類の歴史の偉業であり、経済的な平等社会を短期的に

実現してきた時代である。普通の人々が豊かさを享受できた時代である。それは、企業が従業員とともに協調して成し遂げたのである。

しかしながら、世界に類を見ない労働組合との協力関係は、時として組織を危機におとしめることになる。「破滅への疾走」(高杉良著)は、日産自動車の会長(川又克二)と労働組合・自動車労連会長(塩路一郎)の自己利己的な意思決定と権力闘争の醜さを見事に分析し表現している。「鑄は鉄より生じ、やがて鉄そのものを滅ぼす」という明言は、組織が経営者やリーダーの資質にいかにか依存しているかを如実に示している。伝統的な日本社会において、滅私奉公の精神が守られてきた。現代では「公」とは「おおやけ」すなわち社会と解すべきであろう。日本の社会においては、「おかげさまで」の他者を思いやる精神は、消滅しつつある。他人の存在など無視し、踏みつける状況すら存在するのである。ITバブルの落とし子であるライブドアのホリエモンなどはその典型であろう。

高杉良は徹底した自己取材による資料の解析を通じて、小説に登場する人物行動の個性的表現と入念な心理描写によって臨場感を醸し出している。高杉良は、経済小説といわれる分野の先駆者であり第一人者である。彼は、企業とビジネスの不合理さや冷たさに焦点を当て、組織の非人間的側面をえぐり出し、倫理の大切さを強調している。現代社会に生きる者として、ビジネス社会の在り方に警鐘を鳴らしている彼の声に、今こそ耳を傾ける必要がある。

日本は、良きにつけ悪きにつけ、アメリカ社会を後追いしている。現在の格差社会が、これからも、急速に悪化することは予想に難くない。10年後の日本の姿を想定しうる予言の書として、「ルボ 貧困大国アメリカ」(堤未果著)も一読していただきたい。

社会の変化を鳥瞰し、自己の人生観に思いを持つことは、何のしがらみもない学生時代にこそ成しうることでできよう。

\* \* \* \* \*

高橋 孝助著

## 『飢饉と救済の社会史』

(青木書店 2006年)

現代中国学部長 馬場 毅

本書は1876年から1878年にかけて起きた、日本では従来注目されることのなかった中国近代史上の大旱魃と飢饉状態およびそれに対する救済活動を取り上げたものである。

ここに描かれているのは、第1に大旱魃と飢饉の実状である。そこでは、餓死者が相次ぎ、生き残ったものは草や根を食べ尽くし、ついには人肉を食べたという悲惨な状況、さらには飢餓線上の彼らは難民として、幽鬼のように都市部へ移動していく。そしてその過程で親が手放す子供を買い手が横行する。都市に行っても官側および都市住民は、難民を無頼の民と同一視し、都市の社会秩序を守ることを第一義的に追求するという当時の苛酷な実状が描かれている。

第2にこのような惨状に対しての懸命の救済活動の実情が描かれている。清朝側の官も穀物を確保し、実際に飢餓地域に届いたものは少量であったが、飢餓地域に穀物を輸送しようと試みている。また官側と協力しながら救済に立ち上がった善士と呼ばれる人々、さらに当時の排外的風潮の中で、命がけで救済に携わったキリスト教の外国人宣教師の姿が描かれている。善士は義捐金で、婦女を人買いから買い戻したりし、外国人宣教師は、孤児を収容施設に収容し縁者に引き取らせたりして、懸命の救済活動をしている。このような官や善士や外国人宣教師などの救済活動の叙述の箇所は、本書の魅力を際立たせている。

自然災害による飢饉とその救済という本書のテーマは、単に19世紀後半期だけではなく古代から現代まで通じるテーマであり、特に1958年から始まる大躍進運動はその政策的誤りと自然災害も加わり、多くの餓死者を出した。このような現代中国の問題を考えるにも示唆を与える本書を学生諸君に勧めたい。

## シリーズ学会紹介 その②

経済学会会務委員 保住 敏彦

学会紹介の一つとして、経済学会の紹介を書くように依頼された。最初、会則に基づき学会の目的・活動・組織を紹介し、実際の活動については、私の任期中（2007年9月2008年9月）の講演会や資料収集について紹介したい。

愛知大学経済学会は、その会則によると、「会員相互の交流を図り、経済学ならびに基礎諸科学の学術研究その発表を促進すること」を目的とし、そのために「1. 機関誌その他の図書の刊行、2. 研究会および講演会の開催、3. 会員の研究の助成、4. 研究者間の連絡および協力体制の促進」その他の事業を行うことになっている。したがって、経済学会の目的は、経済学部の教員の研究活動とその成果の発表を援助するという課題を担っているといえる。

近年、FD活動が強化され、文部科学省・私学事業団・大学基準協会から各大学当局にいたるまで、教員の教育活動については支援と監視がなされるようになった。しかし、大学の教員の任務には、教育活動だけでなく研究活動も含まれている。（さらに、かなり多くの大学では、教員は学内の教育行政に携わり、時には経営に関与することもあるのは、周知のとおりである。）高等学校までの教育においては、文科省の教育指導要領に従って教育することが義務付けられているが、大学の教育においては、教員が専門領域について研究した成果を教育するのが建前である。経済学会は、教員の研究活動を支援することにより、間接的に大学の教育を助長しようとする。また、学会は、研究会や講演会を開催することにより、学生や市民にたいする啓蒙活動をおこなう。

ところで、経済学会の構成員は、正会員（経済学部の専任教員）、学生会員（経済学部学

生および経済学研究科院生、および中国研究科の院生のうち認められたもの）、および準会員（正会員2名以上の推薦により評議員会の承認を得られたもの）からなる。経済学会の役員は、会長（経済学部長が兼任）、評議員（正会員で評議員会の構成員）、会務委員（2名、うち一名が常務委員、機関誌の発行その他の会務を遂行する）である。評議員会の総会が、最高の意志決定機関である。このように、経済学会は、経済学部の教員と学生が、正会員と学生会員として、研究活動、啓蒙活動を行ってゆくものである。

具体的な活動としては、『愛知大学経済論集』を年間3号刊行している。昨年来、175号、176号、177号を刊行した。学生には無料で配布されている。講演会としては、2007年11月に「米国サブプライム問題の行く方」（宇野大介氏・三井住友銀行）、2008年6月に「グローバル化とヨーロッパ連合 ジャン・モネとEUの成立およびその後をめぐって」（三浦弘次氏・九州産業大学）と、「地域銀行のマクロ環境と経営状態の定量分析」（寺崎友芳氏・日本政策投資銀行）を開催した。また研究会として、「グローバル化と東アジアの金融制度」（奥野博幸氏・本学経営学部）を開催した。

研究館2階の経済学会室には他大学の紀要や重要学術雑誌が置かれており、語学辞典・経済学辞典・百科事典・各種統計集が配備されている。昨年、久しぶりに、これらレファランス関係書物を最近刊行されたものに革新したので、教員および学生さんのご利用を期待している。学会はまた、学生のすぐれた卒業論文に対して、経済学会賞や努力賞を授与し、学生の活動に対して援助をしている。

（経済学部教授）

## 「家永文庫」のこと

中国研究科博士課程 湯原 健一

2007年、中国へ留学し、南開大学日本研究院へ1年間お世話になった。日本研究院は、中国有数の日本研究機関である。研究棟には、研究院所属教員の研究室や講義などを行う教室が備えられている。また、研究棟の東側半分の1階と2階に、日本語資料が納められている資料室が併設されていた。

資料室の蔵書は、南開大学教授俞辛焯氏の蔵書をもとにして、日本語文献が集められている。そうした蔵書のなかで、資料室の中核となっているのが「家永文庫」と名付けられた、故家永三郎氏の旧蔵書である。

2004年に、家永家から寄贈された蔵書は、資料室の書庫の半分を占める膨大な量である。資料室の職員によれば、日本研究院に寄贈された蔵書は約1万3千冊。送られてきた段ボール数は約500箱あまりだったという。受け入れ当時は、文字通り「汗牛充棟」という状況だったらしい。

家永文庫には、氏の専門分野である日本古代史に限らず広汎な範囲の書籍が納められていた。驚くべきことは書架に立ち、手にした本のほとんどに赤鉛筆で線が引かれているところである。家永文庫を閲覧する度に、おそらく定規を使って一本一本引かれたであろう赤鉛筆の線から家永氏の几帳面な性格が表れており、自分自身の襟を正さねばという思いにとらわれた。

さて最後に、家永文庫の隣には、もう一つの文庫がある。それは元愛知大学教授であり、いわゆる「家永教科書裁判」で証人となった故江口圭一氏の文庫である。二人のつながりを物語るように江口氏の蔵書には、家永氏の、家永氏の蔵書には江口氏の著書がそれぞれ納められ、互いの著書に「謹呈・著者」と自署されている箇所があったのを見つけ、二人の学究の静かな交流の痕跡が垣間見えた気がした。

## 図書館 私の揺籃 -その今昔-

文学研究科研究生 前田 豊子

開架室の書棚や書庫にびっしり詰っている本の林に足を踏み入ると些か圧倒されるけれども、私は心底から落ち着き嬉しくなる。

第2次世界大戦の頃学生であった私は戦況の厳しくなる前に、学校図書館や数少ない公立図書館を度々訪れた。当時は館内で読む本を借りるのに、目録カードを繰って請求用紙に書名等を記入しカウンターに提出、係員が何名分も纏めて書庫に入って探してもらう方式であった。かなりの時間待っても貸出中等で希望の本が一度で手元に来ることは珍しく、何度も別の本を請求して漸く一冊を手にする状況であった。館外貸出はまた複雑な手続きを必要としたものだった。

敗戦の数年後図書館に開架式が採用され、自由に書架で本を探することができるようになった時の嬉しさは忘れられない。

現在のコンピューターで自由に広範に検索できることは私には驚きそのものである。愛知大学の学内のことだけに限っても、豊橋で借りた本も車道校舎での返却を認めていただけることは、名古屋に住む私には誠に便利でありがたいことである。日進月歩の電子情報関連の技術に囲まれている現在、昔人間の私にはうまく利用しきれないけれども、それらも含めて図書館の恩恵を目いっぱい享受していることは間違いない。

本好きの、そして晩学の私は若い時期から今日まで、測り知れないほど数多くの本に、そして図書館に育まれてきたと言っても過言ではない。図書館は私の「心の揺籃」であり、限りなく感謝している。

電子情報全盛で、書籍離れも言われているけれども、それらの情報の活用と併せて、多くの人に紙の書籍や図書館もこれまで以上に忘れずに活用して欲しいと思うことしきりの昨今である。

## 図書館の利用者として

経済学部 大日方 成光

私は、私事情で経済学を中心とした学問を身につける必要性があることから、図書館（豊橋校舎）を頻繁に利用させていただいているが、愛知大学の図書館には、数多くの書籍や資料、そして設備が整っており、本当に満足している。

授業期間中の開館時間帯は21時30分までであり、下宿生活をしている私にとっては、一度帰宅をして、夕食を済ませてから、また図書館へ行くという生活を続けることが可能である。特に私は、時間を忘れて勉学や書物に没頭することができる夜間の時間帯が好きである。また、テストのある月においては、日曜日も開館していただくなど、大学や職員の方に対して本当にありがたいと思っている。愛知大学の図書館には、大学生が思い切り勉学ができる環境が整っているため、利用しなければ本当に損だと思う。

ただ、図書館に対して一つだけ要望がある。それは、テスト期間中に限って図書館に増加する騒がしい学生を何とかしてほしいということである。これは、私のみならず、普段から図書館を利用させていただいている友人達の切なる要望でもある。同期間中は、テスト対策のために騒がしい学生が増え、飲食はする、騒ぐ、電話をするなど、普段は静寂な図書館が、動物園化する。私は当初、それらの学生に注意をしていたものの、きりがないので止めてしまった。

普段から、図書館には勉学に励んでいる学生が数多くいる。彼らが、疎外されることのないよう、周囲に迷惑を掛ける学生には、ペナルティーを課す等、なんらかの手段を講じて欲しいと思うし、そうするべきだと思う。私の大学生活は残り僅かであるが、それまでに図書館を精一杯利用させて頂きたいと思っている。

## 本から得られるもの

経営学部 松下 晃久

子供の頃から、本を読むことが大好きだった。多くの本が所蔵されている図書館は、とても魅力的な空間である。自分にとって、図書館に足を運ぶことは非日常的な幸せを感じる瞬間でもある。図書館特有の空気と言うものが好きで本を借りる、勉強すると言った明確な目的がない時でもその中に身を置きたくなる。図書館の空気は共有している人達で作られるものであり試験前など混雑する時期は、普段は閑散としたのどかな雰囲気が一変する。一人一人の意識や世界は交わることはないが、空間の共有という感覚はある。

いつの頃からか活字離れが問題になっているがどうして文字媒体の利用率が下がったのであろうか？よくインターネットの発達と耳にする。確かに、急速な進展による多様化には目を見張るものがあるが理由はそれだけだろうか？改めて本を読むことの素晴らしさを考えてみてほしい。本を読むことは、豊かな人生観を形成し、将来の選択肢が増えることに繋がると思う。知識は壁にぶつかった時、方向性が分からなかった時に解決のツールにもなる。

本学の図書館は開架方式を採用している。十分な蔵書はもちろん誰にでも等しく利用機会が与えられ、時間や場所を問わず OPAC も検索、利用できる知の宝庫である。開架方式のメリットも生かし、膨大な蔵書の中からお目当ての一冊だけに目を向けるのではなく、その隣や周辺にも目を向けて見てもおもしろいと思う。なぜなら、手に取って読んでみたらすぐ隣が本当のお目当ての一冊かもしれない。もし検索して読みたい本がないようであれば、購入希望図書として申請すれば図書館に置いて貰える。是非多くの本を読み、学んで、知的好奇心を刺激してほしい。そして、充実した学生生活を送ってほしいと心から思う。

## 図書館ホームページ・リニューアル

2008年4月、「利用者サービスを充実する」とのコンセプトのもと、愛知大学図書館のホームページ（以下：図書館HP）をリニューアルしました。（図1）トップページ左側のメニューをご覧ください。「閲覧カレンダー」「利用案内」「図書館紹介」「蔵書検索」「データベース」「電子ブック」「リンク集」等をクリックすることにより、詳細ページにアクセスできます。

図書館HPは、図書館からのお知らせを発信するだけでなく、利用者にとって図書館の蔵書検索ツールや図書館で契約しているデータベース等への窓口であり、道先案内の役割を担っています。

具体的には、図書館HPには蔵書検索ツールやデータベースへのリンクがあり、このリンクによって利用者は、検索ツールやデータベースに辿りつきます。そのため、このリンクの完成度によって図書館の蔵書検索ツール、データベースの利用度が左右されるといっても過言ではありません。図書館の膨大な資料を使うには蔵書検索ツールは必須ですし、図書館で契約しているデータベースは利用者に活用してもらわなければ意味がありません。その点から図書館HPは非常に重要な役割を担っていると言えるのです。

いっぽう、利用される方は、蔵書検索ツールやデータベース等を日頃から活用される利用者から、初めて使う利用者まで様々です。そのため、蔵書検索ツールやデータベースへの窓口と道先案内は、初心者でも迷うことなく利用できる工夫が必要です。



(図1)

## 一新されたデータベースリスト・電子資料の充実

データベースを選択するにあたって、種別によって選択する方式から、用途別インデックスから選択する方式にリニューアルしました。利用者にとって、「利用目的（～したい）」でデータベースを容易に選択可能となったのです。（図2）

また、初めてデータベースを使う人のために、データベースの概要、同時アクセス数等の利用上の注意事項について、「サービス詳細」をクリックすることにより、確認できるようにしました。（図2）

更に今回、新しく導入されたのが「電子ブック」です。ネットワークを介し契約している資料を、直に書籍を見るのではなく、PCのモニター上で実際のページを捲るかのように関覧できます。もちろん、新聞、論文、判例集等もご覧になれます。（図3）

## 最後に

本学関係者を対象にリニューアルの大きなポイントのみ取り上げましたが、他にも改良点が多数ありますので、是非ご利用ください。そして、図書館を有効にかつ有意義にご活用ください。何かご意見等がございましたら図書館までお寄せください。

（文：名古屋図書館 濱口庸介）



(図2)



(図3)

編集・発行 愛知大学図書館 2008年11月15日発行 No.35

- 豊橋図書館 〒441-8522 豊橋市町畑町字町畑1-1 ☎(0532) 47-4181
- 名古屋図書館 〒470-0296 西加茂郡三好町黒笹370 ☎(0561) 36-1115
- 車道図書館 〒461-8641 名古屋市東区筒井二丁目10-31 ☎(052) 937-8116

URL <http://library.aichi-u.ac.jp>